



IFES Issues and Analysis - NO.62 [2017-12] May. 31, 2017

北朝鮮の核・ミサイル高度化問題 猶予と制裁の間



金東葉
慶南大極東問題研究所教授
donykim@kyungnam.ac.kr

慶南大極東問題研究所は文在寅政権発足に関して「懸案診断」を4回連続で発行・配布します。前回までの「南北関係の修復・正常化」、「THAADと米韓・中韓関係」に続き、今回は「北朝鮮の核・ミサイル高度化」について考察しました。次回は開城工業団地再開を取り上げます。

韓国の新政権が発足してから約10日の間に、北朝鮮は2回にわたって新型弾道ミサイルを発射した。北朝鮮の核・ミサイル開発のスピードは恐ろしいほどに速い。万一、実際に北朝鮮が核弾頭を搭載した大陸間弾道ミサイル(ICBM)で米本土を攻撃できる能力を持つようになる場合、米国のトランプ政権がいかなる行動を取るかは予測し難い。その時期になれば、韓国と中国が止めたとしても米国が忍耐力と自制力を見せるとは言い切れない。憂慮していた軍事的選択肢が現実化しかねない。

文在寅(ムン・ジェイン)大統領も17日、就任後初めて国防部と合同参謀本部を訪れた際、「北の核とミサイルが急速に高度化し、現実化した」として懸念を表明した。北朝鮮の核・ミサイル高度化は朝鮮半島の安全保障上の不安を深刻化させるため、新政権が解決すべき喫緊の課題であることは明白だ。ただし、北朝鮮の核・ミサイル高度化問題の解決は当面の安全保障上の問題にとどまらない。北朝鮮の核問題の解決に向けた出発点になり得ることから重要な挑戦課題でもある。

金正恩(キム・ジョンウン)時代の北朝鮮は「核武力・経済並進路線」を掲げ、安全保障と経済の二兎を追うため必死である。しかし、今のような制裁局面でこれは不可能である。北朝鮮は「核放棄のジレンマ」と「核保有のジレンマ」というメビウスの輪に陥っている。北朝鮮自らが核武力は米国との交渉手段ではないと主張しているが、結局、生存のために輪を解けるのは米国しかおらず、米国との交渉は不可欠になる。

トランプ新政権の登場は北朝鮮にとって米国と交渉を再開できるチャンスとなる。それにも関わらず、金正恩氏は核・ミサイル開発にさらに執着する姿を見せている。トランプ新政権に対し、北朝鮮の核・ミサイル問題が何より急がれる問題であることを認識させ、交渉のテーブルに着くよう促していることから、北朝鮮の焦りが感じられる。ゲームを前倒しすることはできないとしても、交渉カードを増やし、存在価値を高める狙いといえる。

北朝鮮は米国との交渉前にICBMを確実なカードにしようとし、米国は北朝鮮がICBMというカードを持つ状況を懸念している。北朝鮮のこれ以上の核・ミサイル高度化を防ぐため、原子力空母や戦略爆撃機を派遣し、軍事行動を示唆しながら脅迫も加え、中国を通じて圧力も行使しているが、北朝鮮のミサイル発射は続いている。

北朝鮮のミサイル発射にも関わらず、米朝対話の可能性を示すシグナルが見られている。トランプ米大統領は韓国の洪錫炫(ホン・ソクヒョン)対米特使と面会した際、「一定の条件が整えば、関与(対話)を通じて平和をつくっていく意向を持っている」と述べた。ここで「一定の条件」を北朝鮮の核放棄の約束と見なすことは非現実的である。北朝鮮が核・ミサイルを高度化せず、開発を中断することがより現実的な条件である。米国の国連大使も「北朝鮮が核・ミサイルに関する実験を全面中断するなら、対話に乗り出す用意がある」と表明した。核実験とミサイル発射の猶予という入口を通じ、非核化の長いトンネルに入り、核廃棄という出口に向かう「猶予入口論」が浮上している。

完全な核廃棄という究極的な目標は変えられない。しかし、非核化はプロセスであり、前後関係ではない。戦略的忍耐がもたらした失敗の教訓のように、待てば待つほど北朝鮮の核・ミサイルは次第により高度化し、核問題の解決はさらに遠のくほかない。現時点では北朝鮮がこれ以上核とミサイルを高度化できないように、新たな核実験とミサイル発射実験を猶予させることが急務である。「核・ミサイル実験猶予」も北朝鮮が切る重要な交渉カードだとすれば、少なくとも猶予という「一定の条件」が成立してからこそ対話を開始できるというのも戦略的忍耐とほとんど変わらない。対話の条件を待つ間、北朝鮮の核・ミサイルはさらに高度化するほかない。結局、すぐにも対話は開始することが、今のように対話の条件をめぐって神経戦を繰り返すよりは「猶予」という入口により

入り易くなる。

まず、核実験とミサイル発射の猶予を通じ、将来の核開発と高度化を凍結できる。その後、現在の核能力を閉鎖、封印、検証して後戻りできないように不能化し、過去に製造した核兵器まで完全に廃棄しなければならない。しかし、何らかの見返りもなく北朝鮮の核問題を解決することは現実的に不可能である。米国としても段階別に北朝鮮に何を提供して非核化の道に引き出すか、悩ましい状況である。

北朝鮮は核実験とミサイル発射実験の猶予に対し、物質的な見返りよりもまずは制裁の解除を要求してくる可能性が高い。核実験とミサイル発射を分離し、サラミ戦術を展開する可能性もある。もしICBM発射にまで成功すれば、交渉カードをさらに細分化して要求するかもしれない。猶予と制裁の間で接点を見いだすことは容易ではない。「猶予」という入口を通じて非核化に向けた本格的な対話の局面に進んでいくためには、米国と北朝鮮が考える初期の条件が異なる可能性があるため、これをいかにうまく調整していくかが局面転換の重要な分岐点になる。まず、対話を行い、猶予とともに制裁の緩和に向けた議論は始めるものの、実質的な制裁の解除は国際原子力機関(IAEA)視察団の復帰や活動に合わせ、段階的に進めていくことができる。

まだ米国が対話に軸足を移したとみるのは時期尚早である。今の米国は、北朝鮮の核・ミサイル高度化問題すら自ら解決するのに手こずっている。依然としてトランプ政権には北朝鮮問題より優先的に解決すべき問題が山積しているためである。核実験やミサイル発射猶予を出発点にするとしても、高水準の対北朝鮮制裁解除の要求を簡単に受け入れることは困難である。大きな溝があるのは明白だ。その溝こそが韓国の役割で埋められるチャンス場となり得る。韓国が米国に北朝鮮の核問題解決に向けた米朝対話の早期開始を積極的に促さなければならない。同時に、一日も早く南北関係を修復し、核問題と直決する分野ではない限り、制裁局面下でも可能な対北朝鮮支援や南北交流再開の糸口を探らなければならない。これは制裁の水準を調整する大義名分を提供するだけでなく、米国に対し米朝対話を働きかけ、中国に対しては積極的な協力を要求できるようにする。

韓国でも新政権が発足した。トランプ政権発足より約5カ月遅れたのだ。北朝鮮問題における出発は五歩遅れたが、一步前に進める機会が訪れている。今、前に進めないと排除される可能性がある。コリア・パッシング(Korea Passing)への懸念を乗り越え、「6カ国協議を通じた非核化」であれ、「4カ国フォーラムを通じた平和体制」であれ、韓国の声が反映されるべきであり、南北関係が重要な位置を占めなければならない。韓国と南北関係は米朝対話と非核化の促進剤であり、障害物ではない。米韓同盟と南北関係を有機的に連携し、北朝鮮との関係改善を通じた連携を積極的に活用すれば、北朝鮮の核・ミサイル高度化を遮断しつつ、北朝鮮を対話のテーブルに着かせることが可能とみられる。また、南北関係という特殊な関係を利用し、人道支援や交流の再開を通じて制裁解除の大義名分を提供しながら、南北関係が一步前に進む機会をつくることを望みたい。段階的(猶予・凍結・不能化・非核化)、多元的(6カ国非核化・4カ国平和フォーラム・南北/米朝協議)、包括的(安全保障・経済)という精巧な韓国型ロードマップの作成が急がれる。

MORE ARTICLES

—上記の内容は著者の意見であり、極東問題研究所の公式な立場を示すものではありません。
—メールリングリストに登録をご希望の方はお名前や電子メールアドレス、所属先を下記のメールアドレスまでお送りください。 ifes@kyungnam.ac.kr

You can remove your email address from our mailing list by clicking link below
[\[No longer receive e-mail\]](#)



경남대학교 극동문제연구소
The Institute for Far Eastern Studies

COPYRIGHT(C) 2010 IFES ALL RIGHTS RESERVED
2(Samcheong-dong) Bukchon-ro 15-gil, Jongno-gu, Seoul 110-230,
Republic of Korea
TEL. +82-2-3700-0739 FAX. +82-2-3700-0707
EMAIL. ifes@kyungnam.ac.kr